

24 講義内容 日本語の奥を見そして知る

日本語文化の奥深さを実感しておきましょう。季節は愈々「ことじめ」を済ませ、「ことはじめ」に入りました。新たな年を迎えるための準備に入ります。私たちにも日本語の「ことじめ」から「ことはじめ」への移行をしたいと考えました。そこで川端康成の短編作品を素材に実際どのように向き合えばよいのかをここに纏めてみました。

「テスト」

次の漢字の読みをかたを書きなさい。

A 初心者篇「入」の文字

○あの人は氣に入らない。

● つつじの大きい造花のやうなこの花は、餘りに派手過ぎるのに匂ひがないためか、見てゐると空・な感じがして私の氣に入らない。「川端康成『白い満月』7頁⑩」

○「あの子ずゐぶん無愛想で亂暴らしいのね。亂暴なのがお氣に入つてるんぢやない？」「川端康成『白い満月』24頁③」

● 「なぜなら、母は父が死ぬ一年ほど前から佛教を棄てて基督教に熱狂してゐた。だから母はこの新しい宗教に入つてからの最初の莊嚴な祭典を取行ふことに、悲しみながらもいそいそと喜び

を感じただらう。」「川端康成『白い満月』31頁⑩」

○ 「水を見ていけないんだと困るわね。この村はどこへ行つたつて谷川の音が聞えるんだし、温泉にもは入れやしない。湯の中で發作を起したら、ね、湯の中で發作を起したら。」「川端康成『白い満月』42頁⑤」

○ 妻は四月のやうに暖かい二月の入海を寢不足な眼で眺めて、物思ひに沈んでゐる。「川端康成『驢馬に乗る妻』139頁⑬」

B 中級篇「音」の文字

○ また、財産を誰の手に渡したところで、そんなことで解決出来るとは思へないが、お母さんを疑つてゐると云はれるとぐうの音も出ない。「川端康成『白い満月』頁」

● 「水を見ていけないんだと困るわね。この村はどこへ行つたつて谷川の音が聞えるんだし、温泉にもは入れやしない。湯の中で發作を起したら、ね、湯の中で發作を起したら。」「川端康成『白い満月』42頁⑤」

C 上級篇「生」の文字

○ からだが危ないので笑ふにも笑へないのか、おかしさと生真面目さとの入交つた表情を見せて、ほてつた頬を生き生きと輝かせてゐる。「川端康成『驢馬に乗る妻』126頁⑩〜⑫」

● 「こら。この子に觸つておくれでないよ。生娘なんだからね。」「川端康成『伊豆の踊子』300頁④」

D 応用篇

● 「私が本を讀ませる役なんです。坊つちゃんはからだだがぐにやぐにやですから頁を剥れないで

せう。私が傍らについて剥つて上げますんです。一日中本を讀んでみました。」〔川端康成『白い満月』8頁⑩⑪〕

○却つて、初めて見物の前に出た小娘らしく、緑の葉に紅い花らしいのを散らした、腰のまわりと手首にひだを拵へた新しい乗馬着の身姿を恥らふ心が抑へ切れなかつた。〔川端康成『招魂祭一景』84頁②〕

●葬式の日多くの会葬者から弔問を受けてゐる最中に私は突然鼻血が鼻孔を流れ下つて來るのを感じた。〔川端康成『葬式の名人』153頁①〕

○いゝえ、星も、かたつむりも、鼠も、露草の花も、小石もこの世界にありとあらゆるものの中に、優り劣りなぞないと思つて居りました。この世は一つのものでございます。〔川端康成『犠牲の花嫁』174頁⑤⑥⑦〕

さあ、如何でしたかな。実に簡単そうに見えて実は結構厄介な読みかたなのです。右の文章を読解する力を貴方自身はほんとうにお持ちですか？

次の文に（ ）印のなかに最も適応することば表現をアからエより選り記号で答えなさい。

1, 新吉はくるりと（ ）て、出口へ行くけい子達とは反對に乗車口の方へ歩き出した。〔川端康成『五月の幻』258頁⑩〕

ア、頭を働かし。イ、目を背け。ウ、腹を固め。エ、踵を廻し。

2, 「さうです。あなたは汽車の中で私を嫉妬に燃えた（ ）いらしゃいました。」〔川端康成『五月の幻』268頁⑩〕

ア、含み聲で。イ、目で睨んで。ウ、物知り顔で。エ、むしゃくしゃ腹で。

3, 仄暗い湯殿の奥から、突然裸の女が走り出して來たかと思ふと、脱衣場の突鼻に川岸へ飛び下りさうな格好で立ち、兩手を一ぱいに伸して何か叫んでゐる。手拭もない眞裸だ。それが踊り子だった。若桐のやうに（ ）白い裸身を眺めて、私は心に清水を感じ、ほうつと深い息を吐いてから、ことごと笑つた。子供なんだ。〔川端康成『伊豆の踊子』289頁⑪⑭〕

ア、手が付かない。イ、肩の力を抜いた。ウ、足のよく伸びた。エ、面食らつた。

次の文中の傍線部の読み方とその意味を記述しなさい。

○美しく晴れ渡つた南伊豆の小春日和で、水かさの増した小川が湯殿下に暖く日を受けてゐた。

〔川端康成『伊豆の踊子』238頁⑨〕

○この美しく光る黒眼がちの大きい眼は踊子の一番美しい持物だった。二重瞼の線が云ひやうなく綺麗だった。それから彼女は花のやうに笑ふのだった。花のやうに笑ふと云ふ言葉が彼女にだけほうんたうだった。〔川端康成『伊豆の踊子』300頁⑪⑫〕

〔コラム〕

「〜です」「〜ます」は、江戸時代は藝奴の**ことば表現**であった。武士は「〜でござる」。商人は「〜でございます」。庶民は「〜だ」。

藝奴「串談はいやですよ」と表現し、これが江戸時代末から明治時代にかけて江戸にやってきた地方の武士が遊里語を覚えて使うようになり、「そうです」「…ですとも」「…ですな」と文末に用い

